

インコと安らぐ たなか踏基

我家でインコを飼い出してから、もうかれこれ三十数年経過している。最初は、群馬県藤岡市に住んでいる時だった。もちろん一匹のインコが、三十数年生きていた訳ではない。何代も代替わりの末の年数である。転居先でもその都度、インコを飼ってきた。今我家では、個性の異なる小型のルリコシボタンインコと、中型のオカメインコを夫々一匹ずつ飼っている。

飼ったインコの種類は、セキセイ、コザクラ、ボタン、オカメの四種類である。ブルーボタンや白ボタンインコを、藤岡の我家で飼っていた時等は、籠に取り付けた巣箱の中で良く繁殖して、雛を何匹もペットショップに売った経験もある。いわば鳥のブリーダーである。でも最初は、やはり簡単なセキセイであった。手乗り物真似インコを飼おうとして、孵化したての赤剥けのセキセイインコを、市内のペットショップから買ってきたのが発端である。

藁製の孵籠(ふんご)に、未だ目も見えない雛鳥を入れ、ヘラの先で親鳥よろしく粟玉の餌を摺り潰して与えた。これを差し餌という。この段階の雛は、人間の赤ん坊と同じで、三〜四時間おきに餌を与えないと、飢えて体温が下がり死んでしまう。日齢間もない内は、一日五〜八回、風切羽と尾羽が生え揃うまで与える必要がある。兎に角、注意して差し餌をし根気良く面倒をみた。時に藁製の孵籠を抱えて車で移動し、子どもと雛鳥を連れて家内の郷里にまで行って昼夜餌を遣り続けた。初手から餌付けが上手く行くとは限らない。でも何回か試みる内に一度、ヘラと餌との関

係を目の見えない雛が学習すると、その後はヘラその物が親となるのである。口元に寄せられたヘラの感触を頼りに、口を開けて満腹するまで餌をねだる。餌とは粟玉である。

粟玉とは、本当は粟と玉子の略称で、剥き粟に玉子(卵)をまぶした幼鳥用の餌である。ところが、実際ペットショップで売っている粟玉と称する餌は、剥き粟のみで玉子をまぶしていないものもあるという。この餌で幼鳥を飼って二度失敗した経験がある。

この粟玉を遣り続けて、栄養失調性の脚気に幼鳥が罹ったからである。羽根が生え揃って、も未だ良く飛べないのだが、孵籠から出すと毎日私を追い回すようになる。ピョンコ、ピョンコと歩いて付いて来る姿は実に可愛いらしい。

程なくして巣立ちの時期、自分で孵籠から出たがるようになった。外に出ると畳の上を、例によって歩き回る。その内にビッコを引くようになった。栄養価の高い餌に切変える時期を間違えたのである。直ぐに粟玉から、皮付きの餌に変えた。孵籠から出し止まり木のある籠を買ってきてその中に入れた。撒き餌をして、自分で餌を拾って食べさせるようにした。

本当は、巣立つまでは孵籠から出さず薄暗い中で、様子を伺っているのが良いのだが、つい過保護になって、雛を外に出して遊ばせてしまふ。孵籠を攀じ登って、蓋を取ると自ら飛出さう。意欲を見せるまでは、中に入れて飼うのが良い。突き放して巣立ちの段階を経ることが、雛鳥にとつても必要で、面白がって無闇に外で遊ばせるのはやはり駄目らしい。粟玉の脚気羅病と巣立ちの段階の育て方の話は、後で動物病院の医師から聞いて知った知識である。動物と触れ合うことで、人は楽しみや安らぎを

得る。そうした動物を積極的に利用して、人の心の病気を治療したり、予防したり、体のリハビリに役立てる方法をアニマルセラピーと言う。我家で飼ってきたインコも、少なからず家族の一員として、何度も安らぎを与えてくれた。

与野の社宅時代、家内を追い掛けて鉄のサツシに挟まれたセキセイは、可哀想にビッコになつたが、その後不憫なほど人間を追いかけようになつた。小学生の娘の愛鳥となり、亡くなつた時娘は、それこそ泣き明かした。

手乗りで良く喋るオカメを、私が肩に乗せてペランダに連れ出し、突風にあおられて逃がした時等、家内は「迷子のインコ」を捜す張り紙を作り電信柱に貼って探し歩いた。感情表現がある犬猫ならまだしも、高が小鳥と笑つなけれ、家族にとつては、インコの死や逃走は重大事件であつた。

今家にいる、一匹のインコは私と家内を区別して認識するし、お互い気持ちを通じるのである。面と向かつて、互いに苦言を呈することが出来ない時など、良くインコに愚痴をこぼす。インコも良くしたもので聞き役に回り、状況を察して鼻の穴を穿るかのよう、顔に近づいて唇や耳を愛噛みするのである。どちらが可愛がられてるかを鳥同士が競つかの如く、時にやきもちを焼いたりすねたりするから不思議である。

産業技術総合研究所(産総研)が、アザラシ型ロボットのパロを開発したという。先日、秋葉原ロボット文化祭で見て来た家内が、本気でやがて来る認知症予防に欲しがっている。メンタルコミットロボという範疇らしいが、撫でたり抱っこされたり、人の声を聞分けたりするので、あたかも心があるかの如くであつたという。